様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年２月２８日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720100
研究課題名（和文）共時的・通時的分析を用いた言語衰退の研究－
消滅の危機に瀕した「パラオ日本語」－
研究課題名（英文）Apparent-time and real-time analyses of language attrition: Palauan Japanese as an endangered variety

研究代表者
松本　和子（MATSUMOTO KAZUKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80350239

研究成果の概要：本研究の主たる目的は、10 年前に収集した既存の「パラオ日本語」のデータおよび今回新たに収集したデータを用い、「共時的・通時的」両分析を行いながら、言語衰退・消滅の言語内的・言語外的諸要因を定量的に明らかにすることである。この分析手法は、変異理論を中心とした社会言語学の研究において注目されており、「パラオ日本語」の衰退・消滅のメカニズムを解明するうえで有益なだけではなく、社会言語学で一般的に用いられている共時的分析の妥当性の検証、さらに言語衰退・消滅といった比較的新しい研究分野における調査方法論の構築にも資するものである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1, 300, 000	0	1, 300, 000
2007 年度	1, 300, 000	0	1, 300, 000
2008 年度	800, 000	240, 000	1, 040, 000
年度			
年度			
総　計	3, 400, 000	240, 000	3, 640, 000

研究分野：社会言語学、変異理論
科研費の分科・細目：言語学・社会言語学
キーワード：接触言語、言語衰退、言語消滅、言語変化、共時的分析、通時的分析、パラオ日本語、ディアスポラ日本語

１．研究開始当初の背景

そもそも「言語消滅」、「言語衰退」とは、比較的新しい研究分野であり、その調査方法はいまだに十分に確立されていない。「言語消滅」の分野では、世界的に有名な Dorian (1981)のスコットランド高地ゲール語の消滅の研究で用いられた分析方法が今日まで広く使われ、これまでのパラオ日本語の研究でも採り入れられてきた。具体的には、fluent

speaker（消滅の危機に瀕した言語が流暢な話者）、semi-speaker や rememberer（かつて流暢に話したが現在はその能力が低下した話者）といった異なる言語能力を持つ３つの話者グループを比較分析し、グループ間にみられる言語使用の違いを「消滅の指標」と見なし、言語消滅の過程を考察するものである。しかし、通常、fluent speaker は高齢者、semi-speaker は中・高齢者、rememberer は中年・若年に当てはまることから、こうした分析方法は「共時的（apparent-time）」調査の範疇に入れられる。つまり、ある一時点・定点において、異なる年齢層の話者からデータを収集し、若年層が幼少期に習得する言語使用を中・高齢になっても使い続けるとの「仮定」のもとに、若年層の言語使用を言語変化・消滅の向かう方向として捉える分析方法である。

一方、近年、「言語衰退」の分野では、こうした「仮定」に頼らず、時間の経過とともに、ある言語が失われていく過程を調査することの重要性が指摘されている。これは、「通時的（real-time）」に言語衰退に考察を加えるというもので、具体的には、ある地域で反復的な調査を行い、連続的に言語の衰退を追跡調査する方法である。共時的な調査に比べ、より的確に変化・衰退の傾向・要因を分析できることが利点として強調されている。だが、通時的な調査は、調査方法（サンプリング方法、被験者の数・属性の分布、データの種類・収集法など）が統一されて初めて意義のあるものとなる。そのため、多くの場合、同一調査者によって時間をおいて行われ、10 年、20 年と長い時間を要することから、定量分析を用いた通時的な社会言語学的調査は非常に希少とされる。

通時的調査の最大の問題は、仮に過去のデータがあったとしても、近年、社会言語学で主流を成す言語変異を考慮に入れた定量的なデータとの比較が著しく困難な点にある。例えば伝統的な方言研究では、被験者として NORMs（non-mobile, older, rural, males：生え抜きの老人男性）と呼ばれる典型的な住民数人をその地域の「純粋な方言話者」として意図的に選び、言語使用・言語意識に関する質問を行ってきたため、あくまで限られた被験者の直感に基づいたデータとなることが多い。しかし、近年の変異理論を用いた社会言語学的研究では、各地域で多様な属性から成る多数の被験者から実際の会話データを収集し、その地域における言葉の変異を定量的に考察することが必要とされる。なぜなら異なる種類のデータ（従来の「限られた話者の直感に基づいたデータ」と現在の「多様な属性の話者の実際の会話データ」）を比較分析しても、その精度が高いとは言い難いからである。

まさに上記のような状況を踏まえ、本研究では 10 年前に同一調査者が収集したデータを活用することにより、「過去と現在の調査方法の統一」という通時的な言語調査における課題を克服できると考えた。つまり、新たなデータ収集においても、調査方法（サンプリング方法、被験者の数・属性の分布、データの種類・収集法など）を既存のデータの収集時と同一にできるため、データの差異や誤差を最小限に止められ、精度の高い比較分析を行うことができる。従って、本研究は、ディアスポラ日本語変種を事例とした初めての変異理論・通時的分析を用いた言語衰退の研究となる。

２．研究の目的

社会言語学において、通時的調査には以下２つの種類があるといわれている。まず、「パネル調査（panel studies）」とは、同一被験者を追跡調査するものであるが、被験者の引越しや死亡などの理由で、追跡調査が著しく困難であるため、その例は極めて少ない（Harrington 2000）。一方、「トレンド調査（trend studies）」とは、被験者は必ずしも同一の話者ではなく、同一世代となるため、多くの通時的研究がこれに当てはまる（Trudgill 1988, Bailey *et al.* 1991, 2002, Van de Velde 1996, Blake and Josey 2003, Pope *et al.* 2007）。つまり、現状ではパネル調査の必要性を強調する専門家は多いものの、トレンド調査に限定されるといえる。

本研究では、ディアスポラ日本語変種を事例とした初めてのパネル・トレンド両調査を試みた。また、従来の「言語変化」でなはく、「言語衰退」という比較的新しい研究分野で、こうした研究方法を用いるため、いまだ確立していない「言語衰退」分野における調査方法論の構築へ貢献したいと考えた。さらに他の言語を事例とした先行研究との比較も行い、言語変異と言語衰退の理論の発展にも努め、社会言語学で一般的に用いられている「共時的」分析方法の妥当性をも再検討した。

３．研究の方法

本研究においては、「共時的・通時的」両分析を行うためのデータを揃え、順次その分析・研究を進めている。具体的には、(1) 1997～2000 年の現地調査で得られた「旧データ」の共時的分析、(2) 2007 年～2010 年の現地調

査で新たに集めた「新データ」の共時的分析、(3) 旧新 2 つのデータを併せた通時的分析を行っているが、各方法の詳細は図１の通りである。

図１：共時的・通時的言語調査の概念・方法

<table>
<tr><td colspan="3">(1) 旧データの共時的言語調査（1997〜2000 年に収集したデータにおける以下３つの話者タイプを比較分析し、言語変化・衰退を考察する）</td></tr>
<tr><td>1920 年代
2000 年現在 80 代の fluent speaker が日本語を習得開始</td><td>1930 年代
2000 年現在 70 代の semi-speaker が日本語を習得開始</td><td>1940 年代
2000 年現在 60 代の rememberer が日本語を習得開始</td></tr>
<tr><td colspan="3">(2) 新データの共時的言語調査（2007〜2010 年に収集したデータにおける以下３つの話者タイプを比較分析し、言語変化・衰退を考察する）</td></tr>
<tr><td>1920 年代
2010 年現在 90 代の fluent speaker が日本語を習得開始</td><td>1930 年代
2010 年現在 80 代の semi-speaker が日本語を習得開始</td><td>1940 年代
2010 年現在 70 代の rememberer が日本語を習得開始</td></tr>
<tr><td colspan="3">(3) 通時的言語調査（上記(1)と(2)を比較分析し、10 年間にみられる言語変化・衰退を考察する）</td></tr>
<tr><td>調査(1)
①80 歳代の fluent speaker
②70 歳代の semi-speaker
③60 歳代の rememberer</td><td>調査(2)
①90 歳代の fluent speaker
②80 歳代の semi-speaker
③70 歳代の rememberer</td><td>調査(3)
①パネル調査（同一話者を追跡調査する）
②トレンド調査（同一世代の話者を追跡調査する）</td></tr>
</table>

調査項目としては、(1) モダリティ形式「デショ」「ダロ」、 (2) 人称代名詞、(3) 否定表現、(4) 主語の脱落、(5) カ行・タ行子音の有声化等に着目した。

４．研究成果

ここでは、途中成果報告として、まず上記の(1)~(3)の調査項目に限定し、パネル調査の結果のみを簡単に報告する。とりわけ、10 年前の旧データに基づいた共時的分析から示唆される変化・衰退の傾向が、10 年後の新データ（同一話者のデータ）においても観察されるかどうかという観点から、調査結果の一部を紹介する。

(1) モダリティ形式「デショ」「ダロ」

10 年前の旧データの分析より、パラオ日本語には、モダリティ形式「デショ」「ダロ」に新たな用法があることが明らかにされた。これは、従来の「共有知識の確認要求」の機能から派生したもので、共有されない知識に関連した事柄を話し続けることへの同意を求める機能である。この新用法を共時的に分析した結果、①話者の言語能力が低下するほど、新用法を用いない傾向がみられ、また②新用法にはダロ形式よりもデショ形式が好まれる傾向が示された。つまり、パラオ日本語の形成期に生まれたダロ・デショの新用法が衰退しており、特にダロ形式の著しい衰退を明確にした。これは、Wolfram (2002) が提唱する言語消滅モデルのひとつである「消散モデル(dissipation models: 消滅していく言語は構造的・スタイル的に縮小していく)」を支持する結果といえる。

一方、10 年後の同一話者の通時的分析では、新用法の衰退がさらに進んでいることが確認された。10 年前には言語能力が最も低い話者タイプ rememberer のみが新用法を採用していなかったが､10 年後には rememberer のみならず semi-speaker にまで衰退が波及していた。形式面においても、デショ形式のみが新用法で用いられており、ダロ形式が新用法の機能を持たなくなっていた。つまり、10 年前の旧データの共時的分析で示唆された言語衰退の傾向が、10 年後の新データにおいても観察されたため、共時的分析の妥当性を支持する結果となった。

(2) 人称代名詞

１人称・３人称の代名詞を共時的に分析した結果、①話者の言語能力が下がるほど、話し手、および談話の中で指定される人物の性を明示しない形式（「ワタシ」、「ミンナ」、「ジブン」など）を好む傾向がみられた。また、②パラオ日本語の特徴として、本国日本の日本語では事物に対して用いられる指示代名詞「アレ」、「ソレ」や、さらに人称代名詞の複数形「〜タチ」を接辞した「アレタチ」などの新形式を３人称代名詞として用いる傾向があるが、話者の言語能力が低下するほど、こうした言語使用が減少することも明らかになった。つまり、①の傾向は単純化を、一方、②はパラオ日本語の形成期に新たに作られた人称代名詞の新形式が衰退していることを示唆する。これは、前述の「消散モデル」（Wolfram 2002）を支持する結果といえる。

また、10 年後の同一話者の通時的分析では、(1)の結果と同様に、上記の傾向が強まっていることを示した。つまり、共時的分析が示す言語衰退の傾向は通時的分析でも観察されたため、共時的分析の妥当性を支持する結果となった。

(3) 否定表現
動詞、名詞、形容名詞、形容詞という４つの品詞の否定を共時的に分析した結果、話者の言語能力が下がるほど、①最も使用頻度の低い品詞の否定形（形容詞の否定形クナイ）が使用頻度のより高い品詞の否定形（名詞・形容名詞の否定形デナイ・ジャナイ）に置き換えられる頻度が増え、また②否定の形態素ナイを使わない語用論的否定表現（pragmatic negation: 例えば、ダメ、アンマリなど）を使用する頻度も増えることが明らかになった。

10 年後の同一話者の通時的分析でも、上記の傾向が一定程度観察されたが、10 年前に比べ劇的な衰退の度合いは観察されなかった。従って、否定表現に関しては共時的分析が示す衰退の方向性は合致するものの、否定の形態素は比較的高く維持されており、衰退が進んでいるとは言い難い。有名なスコットランド高地ゲール語の消滅の研究のなかで、Dorian（1978）は形態素が最後まで生き残ることを指摘しており、本研究の否定の形態素に関する研究結果と合致する。

(4) まとめ
３つの調査項目の結果から、共時的分析が示した衰退の「方向性・傾向」は 10 年後に行った同一話者の通時的分析でも一定程度確認されたため、本調査結果は社会言語学で一般的に用いられている共時的分析の妥当性を支持するものとなったといえる。

しかし前述の通り、衰退の進行程度など細部に関しては、項目毎に違いがみられる。今後は現在進行中の大規模なトレンド調査と併せたより精微な分析からこうした相違の要因を探っていきたいと考える。

(5) 今後の展望
今後は、本課題で蓄積した膨大なデータをもとに、大規模なトレンド調査（図１の(3)②）へと発展させる予定である。調査項目も拡充させ、さまざまな言語学的レベルにおける言語変化と言語衰退の通時的研究を進め、わが国内外の社会言語学分野における調査方法論の構築、および言語変異と言語衰退の理論の発展へも貢献したいと考える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① Matsumoto, Kazuko and David Britain (forthcoming) 'Japanese dialect contact and death in the Republic of Palau'. In K. Matsumoto and D. Britain (eds.) The Sociolinguistics of the Japanese Diaspora, Special Issue of *International Journal of the Sociology of Language*. 査読有り

② Matsumoto, Kazuko (forthcoming) 'Sociolinguistcs of a short-lived innovation of the tag *desho*: An endangered Japanese contact variety in the multilingual Republic of Palau'. In L. Landweer and P. Unseth (eds.) The Sociolinguistics of Melanesia, Special Issue of *International Journal of the Sociology of Language*. 査読有り

③ Matsumoto, Kazuko (2010) Palauan language contact and change: A sociolinguistic analysis of borrowing in Palauan. In J. Dobovsek-Sethna, F. Fister-Stoga, C. Duval (eds.), *Linguapax Asia: A Retrospective Edition of Language and Human Rights Issues, Collected Proceedings of Linguapax Asia Symposia 2004 – 2009*. Linguapax Asia: Tokyo: Pp36-52. 査読有り

④ Matsumoto, Kazuko (2010) 'The role of social networks in the post-colonial multilingual island of Palau: Mechanisms of language maintenance and shift', *Multilingua: Journal of Cross-Cultural and Interlanguage Communication* Vol. 29, No. 2, Pp133-165. 査読有り〔第 10 回日本オセアニア学会賞受賞論文〕

⑤ 松本和子 (2010)「ミクロネシアの日本語」『日本語学』Vol. 29, No. 6, Pp58-73. 明治書院. 査読無し

⑥ Matsumoto, Kazuko and David Britain (2009) 'The role of social networks in understanding language maintenance and shift in post-colonial multilingual communities: The case of the Republic of Palau in the Western Pacific', *Essex Research Reports in Linguistics* Vol. 58, No. 2, Pp1-38. 査読無し

〔学会発表〕（計５件）

① Matsumoto, Kazuko (2010) 'An endangered Japanese contact variety in the multilingual Republic of Palau: A new expanded function of the tag *desho*', 43rd Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, Vilnius University, Vilnius, Lithuania, September, 2010. 査読有り

② Matsumoto, Kazuko (2010) 'An endangered Japanese variety in the Oceanic area: Verbal negations in Palauan Japanese', 8th International Conference on Oceanic Linguistics, Auckland University, Auckland, New Zealand, January 2010.査読有り

③ Matsumoto, Kazuko and David Britain (2006) 'Koineisation?: The case of a postcolonial

Japanese variety in Palau', at 16th U.K. Sociolinguistics Symposium, Limerick University, Limerick, Ireland, July 2006.査読有り

④ Matsumoto, Kazuko (2006) 'The founder principle in koine genesis: The case of a postcolonial Japanese variety' (for Research Committee on Sociolinguistics RC25), at 16th International Sociology Association World Congress of Sociology, International Convention Centre, Durban, South Africa, July 2006.査読有り

⑤ Matsumoto, Kazuko (2006) 'An endangered Japanese variety in the Pacific', at 3rd Oxford-Kobe Linguistics Seminar on Endangered Languages, Kobe-Oxford Seminar, Kobe, Japan, April 2006. 査読有り

〔図書〕（計３件）

① 松本和子（出版予定）「社会的ネットワークを活用する」（日比谷潤子編）『はじめて学ぶ社会言語学』京都:ミネルヴァ書房．査読無し

② 松本和子（出版予定）「接触言語を比較する」（日比谷潤子編）『はじめて学ぶ社会言語学』京都:ミネルヴァ書房．査読無し

③ Matsumoto, Kazuko and David Britain (2006) 'Palau: Language situation', in K. Brown (Ed.) *Encyclopedia of Language and Linguistics* (2nd ed.). Elsevier: Oxford. Vol. 9, Pp129-131. 査読無し

６．研究組織

(1)研究代表者
松本　和子（MATSUMOTO KAZUKO）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：80350239

(2)研究協力者
デイビット・ブリテン（DAVID BRITAIN）
ベルン大学・言語学部・教授